

主体的に学ぶ子どもの育成

～新聞を活用した課題設定の工夫を通して～

聖籠町立蓮野小学校

1 学校の概要

蓮野小学校（藤井政明校長、児童数 250 人）は昨年度、創立 150 周年を迎えた伝統ある学校である。サクランボやブドウなどの果樹園に囲まれた自然豊かな地で、恵まれた環境を生かし、様々な教育活動に取り組んでいる。

総合的な学習の時間で弁天潟風致公園の四季の変化や美しさを感じ、その歴史について学んだり、蓮野地区の特産であるサクランボの栽培・収穫を体験したりする中で、児童は地域の特色、魅力を学んでいる。



教育目標「よりよい自分をつくる」の下、子どもたちは日々成長している。

2 NIE 実践のねらい

今年度は、NIE 実践研究委嘱校として、1 年次の研究実践を進めている。

4 月に行った児童アンケートから、児童の大部分が日常的に新聞に触れていないことが明らかになった。新聞を「よく読んでいます」「たまに読んでいます」と答えた児童は 28.7%にとどまっている。このことから、まずは「新聞が身近になること」「新聞に興味をもつこと」が必要であると考えた。新聞が身近になるように環境を整えるとともに、新聞の面白さや可能性を生かした授業づくりをしていくことで児童の意欲を高め、主体的に学ぶ姿を目指していきたいと考えた。

3 本年度の実践の概要

（1）環境整備

会議室の中に新聞コーナーを作り、職員がいつでも新聞を見ることができるようにした。また、全校児童が毎日通る廊下の掲示板に NIE コーナーを設置し、毎日の新聞の閲覧ができるようにした。NIE コーナーには、職員の気になった記事や新聞に関するクイズなどを掲示し、児童が興味をもって見ることができるようにした。

（2）校内研修

5 月に研究全体会を実施し、今年度の研修の方針を全職員で確認した。

6 月に研究推進部による提案授業を行い、全体で協議会を行った。

7 月と 8 月の 2 回、校内 NIE 夏季研修会を実施。8 月の研修会では新潟県 NIE アドバイザーである新発田市立豊浦小学校教頭 関慎太郎様に講師を

依頼し、NIE 授業実践に向けてご指導いただいた。

夏休み明けから、授業を担当している教員による 1 人 1 実践に取り組んできた。12 月 5 日には「NIE 研究発表会」として、3 つの学級で公開授業研修を実施した。校外からもたくさんの方に参加していただくことができた。高学年部は新発田市立豊浦小学校教頭 関慎太郎様、中学年部は下越教育事務所指導主事 小池満喜子様、低学年部は新発田市立御免町小学校 高澤元様に参観いただき、ご指導いただいた。



〈授業研究〉

期日	学年・組	教科・単元名等
6 / 10	4 年 1 組	道徳「おかげさまの命」
9 / 24	4 年 1 組	算数「概数」
10 / 25	6 年 2 組	学活「ネットと上手に付き合おう」
11 / 6	1 年 2 組	図工「お気に入りの新聞写真を飾ろう」
11 / 21	5 年 1 組	道徳「マンガースの根絶」
11 / 26	1 年 1 組 なかよし 5 組	図工「お気に入りの新聞写真を飾ろう」
11 / 28	2 年 1 組	生活「新聞の写真から季節を探そう」
12 / 5	2 年 2 組	生活「様々な写真から季節を探そう」
12 / 5	3 年 1 組	道徳「よりよい自分をつくる」
12 / 5	6 年 1 組	道徳「支え合って生きている」
1 月	3 年 2 組	道徳「フェアプレー精神」
1 月	なかよし 3 組	国語「発見、日本文化のみりよく」
2 月	なかよし 4 組	学活「デジタルのあしあとについて知ろう」

4 実践例

(1) 3 年 1 組 特別の教科 道徳 授業者：教諭 田村 沙也香

① 主題名

「よりよい自分をつくる」

〔内容項目 A - (5) 希望と勇気、努力と強い意志〕

② 使用した新聞記事

「柔道 阿部兄妹 金」新潟日報 2021年7月26日
「兄妹同日V 夢届かず」産経新聞 2024年7月29日
「残酷番狂わせに号泣 阿部詩」新潟日報 2024年7月29日
「パリで魅せた 日本の力」産経新聞 2024年8月9日
「努力の花 パリからロスへ」新潟日報 2024年8月13日
「阿部詩早すぎる幕切れ」新潟日報 2024年7月29日



③ ねらい

新聞記事から、敗戦後も新たな目標に向かって粘り強く努力する阿部詩選手の姿を通して、目標実現の過程には、同じ目標を持つ仲間から勇気をもらったり家族を始め、周りの人から支えてもらったりしていることに気付き、粘り強く努力しようとする態度を育てる。

④ 主な手立て

ア 新聞記事の活用

多様な考えや見方に触れたり、自分の考えを深めたりできるように、悔しい気持ちから次の目標に向かって頑張ろうと思えたときの理由について、産経新聞の記事「パリで魅せた日本の力」や新潟日報の記事「努力の花パリからロスへ」、「阿部詩早すぎる幕切れ」の3つの記事を提示した。また、新聞記事の大まかな内容を理解できるように、新聞記事の注目させたい箇所に線を引いて提示した。

イ 発問の工夫

- 児童の思考をスポーツに限定しないように、導入でスポーツと学校生活の話題を入れて発問した。
- 自分の心が動いた理由の手がかりとなるように、阿部詩選手が次のオリンピックを目指すことができた理由を考えさせた。
- 目標に向かって頑張ろうと思えたいくつかの理由の中から一番の理由を決めさせることで自分の生活に置き換えて、努力について考えを深められるようにした。

⑤ 授業の実際

- 悔しい気持ちから立ち直り、新たな目標に向かって再出発することを決意した理由について考える際に、多様な見方や考え方に触れること

ができるよう、3つの記事を提示した。これにより、再出発の理由として、「自分自身の強い意志」や「同じ目標を持つ仲間（家族）」の存在、「応援してくれる人」の存在があるという見方や考え方に触れさせることができた。

- ・自分にとって「同じ目標を持つ仲間（家族）」や「応援してくれる人」が誰に当たるのかを考えさせることで、課題をより身近に捉えさせることができた。また、板書計画にこだわらず、児童の言葉をそのまま用いて授業を展開することで、児童はより自分事として課題に取り組むことができた。



- ・悔しい思いをした自分自身の経験を想起しやすくするために、導入ではスポーツに加えて、学校生活の話題を取り入れた。これにより、どの児童もこれまでに経験した悔しさを思い出すことができ、学びの手掛かりとなった。
- ・目標に向かって頑張ろうと思えたいくつかの理由の中から、「自分だったら、どの理由がもう一度頑張るきっかけになるか」を考えさせた。一番共感できる理由を先に決めさせたことで、児童は自分の生活と重ね合わせながら課題に取り組むことができた。
- ・多様な見方や考え方に触れさせる手立てとして、「自分だったら気持ちを切り替えて次のオリンピック目指せるか」を挙手で確認した。本時は挙手だけだったが、その理由や意見を出し合い、交流させることでより考えが深まったのではないかと考える。



（２） ６年１組 特別の教科 道徳 授業者：教諭 佐野 明彰

① 主題名

「支え合って生きている」

〔内容項目Ｃ－（１３） 公正、公平、社会正義〕

② 使用した新聞記事

「薬物依存 仲間と克服」読売新聞 2021年12月31日

「依存症 苦しみ打ち明け」新潟日報 2022年11月10日

③ ねらい

新聞記事から、「新潟ダルク」の入寮者の思いや地域住民の気持ちの変化を捉え、一地域住民として施設のことを考える中で、偏見や憶測から否定するのではなく、事実から物事を判断し、相手を理解しようとする道徳的判断力を育てる。

④ 主な手立て

ア 新聞記事の活用

a 児童の薬物依存に対するイメージとのずれを生み、疑問を抱かせるために、過去10年間薬物依存に苦しんだとは思えない田中さんの笑顔あふれる読売新聞の記事「入寮者と談笑する田中さん」の写真のみを児童に提示した。また、入寮者の方々のがんばりや思い、入寮者同志の絆の深さに気付かせるために、笑顔の理由を予想させた後、記事を指導者が読むことで真実を共有した。

b 入寮者の方々を支えている地域住民の存在があったからこそ、当施設が存在し続けることができていることに気付かせるために、新潟日報の記事を児童に配付し、地域住民に関する箇所を下線を引かせながら読む活動を設定した。

イ 発問の工夫

本時の児童の変容及び学びを気付かせるために、「リハビリ施設の建設案に賛成か、反対か」という発問を導入時と終末時の2回設定した。導入時には、ロイロノートで全員の意見を提出させ、全体で共有。終末時には、ワークシートに理由とともに記入させた。

⑤ 授業の実際

- ・既習事項である保健体育「薬物乱用の害と健康」の学習から、薬物を乱用すると体にさまざまな害が現れることや一度でも乱用してしまうとやめることが難しいということを学んでいたため、田中さんの笑顔の写真を提示した際、児童の薬物依存に対するイメージとのずれを生み出すことができた。そのずれから、なぜ田中さんは笑顔でいられるのかを考えていく授業へと展開することができた。また、読売新聞の記事から、入寮者の頑張りや思いに気付くことで、入寮者が治りたいと日々努力している事実を全体で共有することができた。



- ・読売新聞の記事をペアに1枚配布し、「移転当初は住民から不安の声もあったが、今ではあまり聞かれなくなった」理由の記事の中から探す活動を行った。ペアで1枚の新聞を読ませたことで、相談や確認をしながら活動を進める姿があった。また、理由を探させたことで、入寮者が地域に受け入れられるよう地域のために活動する姿や地域住民が入寮者のことを理解しようと交流会に参加する姿などに下線を引き、入寮者の努力のみならず、地域住民が理解しようと行動している様子に気付くことができていた。



- ・「リハビリ施設の建設案に賛成か、反対か」という発問を導入時と終末時の2回設定したことで、授業前の自分と授業後の自分を比べて振り返りを書くことができた児童が多かった。そのことで、授業の学びや自分の考えの深まりを実感することができていた。一方で、終末の発問を同じにしたために、自分事として授業を捉えることが難しかった様子も見られた。終末では、新聞記事の内容から離れ、普段の自分の実生活を見直し、今後どのように行動していきたいかを問う発問にすると、児童の実生活に生きる振り返りとなったのではないかと考えられる。



5 成果

5月と12月にとったアンケートを比べると、新聞を読んだり見たりする児童が増えた。1年間を通して、児童にも職員にも新聞が少しずつ身近なものとなってきている。また、春のアンケートでは新聞の良さについて「その日のテレビの番組が分かる」「天気が分かる」と答える児童が多かったが、12月には「出来事を詳しく知ることができる」「写真付きで分かりやすい」等の回答が見られた。新聞の見る欄や見方にも違いが出てきていることがわかる。

授業を担当しているそれぞれの職員が新聞を活用した公開授業を実施した。授業者は児童の実態に合わせて新聞を活用して授業を組み立てるなど、単元や児童と深く向き合うことができた。児童も教科書等より身近な出来事、自分事として捉え考えることができた。

今年度の成果を来年度に生かし、さらに効果的な新聞の活用をしていけるよう、研修を進めていきたい。

(高橋 亜由美)